The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

雲南の密教と『幻化網タントラ』

川　﨑　一　洋

はじめに

中国の南西端に位置する雲南地方には，8世紀から13世紀（唐代から宋代）にかけて，南詔・大理という二つの王朝が相次いで栄え，仏教，なかんずく独自の密教が盛んに信奉された．

筆者は数年来，南詔・大理時代に当地で書写あるいは制作された，仏典の写本および仏像や仏画などの遺品を調査し，雲南の密教の特色を考察してきた[1]．その過程で，雲南の密教が，中原やその周辺を中心に隆盛した中国唐代の密教の流れを汲むものであることが明らかになったが，一方で，インド後期密教の聖典の一つである『幻化網タントラ』*Māyājāla-tantra* の影響がその随所に見られることが判明した．

『幻化網タントラ』は，プトゥンの分類に従えば，無上瑜伽父タントラ・毘盧遮那部族に属する聖典で，北宋の至道元年（995）に法賢によって『瑜伽大教王経』（大正No. 890）として漢訳されており，リンチェンサンポの翻訳になるチベット語訳（東北No. 466）も伝存する[2]．また，チベットのポタラ宮所蔵の梵文写本の中に，このタントラの断片が存在することが確かめられている[3]．

本稿では，個々の事例を紹介しながら，『幻化網タントラ』が雲南の密教に与えた影響を探ってみたい．

1．『海会八明王四種化現歌賛』に説かれる女尊のグループ

『海会八明王四種化現歌賛』は，『通用啓請儀軌』と題される大理国時代の漢文写本の末尾に書写された，わずか38句からなる偈文である．その冒頭には，「大阿左梨（＝大阿闍梨）周梵彰」という撰者の名前も見られる[4]．

『海会八明王四種化現歌賛』は，唐代に達磨栖那によって漢訳された『大妙金剛大甘露軍拏利焔鬘熾盛仏頂経』（大正No. 965，以下『大妙金剛経』）所説の八大明王

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

にそれぞれ，八仏，八菩薩，八女尊を組み合わせて，さまざまな功徳とともに説く文献である．以下に，その全文を示しておこう．

海会八明王四種化現歌賛　大阿左梨周梵彰述

大日海会多権現　八金剛有四種変　阿芻仏眼及文殊　六足尊統王東面
三火不焼獣不呑　万物無傷蠲等難　毘盧宗那金剛蔵　降三世尊東南角
辟礰飛砂風抜樹　不損群物難除却　宝相摩摩枳地蔵　無能勝尊住正南
地烈山崩劫賊戮　傷穀蝗虫也摧残　弥勒喇奴囉慈氏　大輪尊西南安鎮
薄蝕彗孛宿堕蔵　不錯其纏列本位　弥陀般拏囉観音　馬頭尊住正西面
四色洪水湯湯流　不為漂溺方割難　釈迦倶胝虚空蔵　大笑尊有西北上
郡中亢旱獲霪霖　邪敵不征自除蕩　不空仏多羅普賢　歩擲尊住居正北
冬雷夏氷疫飢饉　刑獄等難声銷息　舎那剰佉羅除蓋　不動尊住東北方
天火焼人并焼獣　毒龍蛇難無有傷　仏及仏母并菩薩　教令輪顕八金剛
若能転此四部尊　郡家寧謐指法疆

そのうち，文殊，金剛蔵，地蔵，慈氏，観音，虚空蔵，普賢，除蓋の八菩薩は，『大妙金剛経』所説の八大菩薩に一致し，八大明王との対応関係も同経の所説と同じである．ただし，『大妙金剛経』には八仏と八女尊は説かれておらず，また，八大明王の尊位も定められていない．

まず八仏の内訳を見ると，阿芻（阿閦・東），宝相（宝生・南），弥陀（阿弥陀・西）・不空（不空成就・北）の金剛界系の四仏に，毘盧（密教の毘盧遮那？），弥勒，釈迦，舎那（華厳の盧舎那仏？）の4尊を加えたものであることがわかる．

次に八女尊に関して，四方の仏眼，摩摩枳，般拏囉（Pāṇḍarā の音写，白衣），多羅の4尊は，一般に「四明妃」と呼ばれる尊格群であり，無上瑜伽部の『秘密集会タントラ』や，瑜伽部の『悪趣清浄タントラ』，『一切秘密タントラ』所説の曼荼羅に登場し，『幻化網タントラ』が説く41尊曼荼羅[5]にも含まれる．

そして，四維の宗那，喇奴囉，倶胝，剰佉羅の4尊は，『幻化網タントラ』の曼荼羅に特有の女尊のグループである尊那（Cundā），宝光（Ratnolkā），顰眉（Bhṛkuṭī），金剛鎖（Vajraśṛṅkhalā）に相当し，それぞれのサンスクリット尊名[6]あるいはその一部を漢字音写で表したものであることが理解される．

このように，『海会八明王四種化現歌賛』は，『大妙金剛経』所説の八大明王と八大菩薩を，『幻化網タントラ』所説の曼荼羅の諸尊と結び付けて説く文献であるといえる．なお，阿閦，宝生，阿弥陀，不空成就を中尊毘盧遮那の東南西北に配する金剛界系の五仏も，『幻化網タントラ』の曼荼羅に登場する．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

2．『般若多心経稽請儀軌』に説かれる十六菩薩

『諸仏菩薩金剛等啓請』は，1956年に雲南省大理市郊外の法蔵寺で発見された仏典写本の中に含まれ，その奥書より，大理国の保天8年（1136）に書写されたことが知られる．日本密教の諸尊法集に相当する文献で，現存する部分にはおよそ40種の一尊法（インド密教にいうsādhana）の次第が含まれている．

そのうち『般若多心経稽請儀軌』は，阿地瞿多訳『陀羅尼集経』（大正№901）の巻第三に基づいて編まれた般若心経法の次第であるが，作壇法を述べる部分において，以下のごとく16尊の菩薩のグループについて言及されている．

●各十六座○若作大壇　場前四十九葉作両重内一重十六葉外重三十三葉　上従東北遶安十六賢聖　●東北面上安弥勒菩薩 Maiḥ　○次文殊師利菩薩 Maḥ　○次香象菩薩　○次智幢菩薩　○南面安賢護　○次海恵菩薩　○次無尽意　○次弁積菩薩　○西面上安大勢至 Sthā　○次滅罪報　○次除幽暗菩薩　○次納明菩薩　○次北面上安月光 Caṃ　○次無量光菩薩 Mi　○虚空蔵菩薩　○次除蓋菩薩　○次排十六薩埵種子同

※写本では種子の部分は朱の梵字で示される．また，区切りのための●あるいは○の印も朱で記入される．

これらの十六菩薩の構成は，金剛界曼荼羅に登場する賢劫十六尊[7]の構成に類似するが，不空見，大精進，金剛蔵，普賢の4尊に代わって文殊師利，海恵，大勢至，除蓋の4尊を含み，『幻化網タントラ』に説かれる41尊曼荼羅の第三重に配される十六菩薩の構成に完全に一致する．その配列の方法も，『幻化網タントラ』の所説に合致する．

なお，『幻化網タントラ』の漢訳である法賢訳『瑜伽大教王経』では，弥勒が慈氏，文殊師利が妙吉祥，海恵が海意，滅罪報が滅一切罪障，除幽暗が除諸憂闇，納明が熾盛光，無量光が甘露光となっており，訳語が異なる．

3．『張勝温画梵像巻』に含まれる女尊の図像

大理国の盛徳5年（1180）に完成したとされる図像集『張勝温画梵像巻』には，多くの貴重な密教図像が収録されているが，そのうち「金色六臂婆蘇陁羅仏母」，「襄愚梨観音」と尊名が記入される2女尊[8]が，『幻化網タントラ』「三摩地品」の記述に極めて忠実に描かれていることが明らかになった．

「金色六臂婆蘇陁羅仏母」と尊名が記されるヴァスダーラー（Vasudhārā）は，『幻化網タントラ』に「持世菩薩（Tib. Nor gyi blo gros ma）」として説かれている[9]．1

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

面6臂で，右の3手に与願印，中から植物が伸びた宝瓶，箭，左の3手に如意宝珠，弓，宝珠が溢れ出る宝瓶を持っており，『幻化網タントラ』の所説によく一致する．左手の宝瓶は，タントラの「第三手降宝雨（Tib. rin chen char ḥbebs)」という記述を表現したものであろう．さらにヴァスダーラーの上部と下部には，宝棒と宝瓶を持つ童子と，大きな容器から種々の宝物を溢れさせる男女の眷属が描かれているが，これは「眷属乃僕従緊羯囉夜叉等．亦悉降宝及五穀雨（Tib. mṅag gshug gnod sbyin mo yi gzugs // rin chen char pa ḥbebs pa daṅ // nor kun gyi ni char pa yaṅ // ḥbebs par byed pa bsam par bya //)」の記述を表現したものと思われる．

「襄愚梨観音」と記されるジャーングリー（Jāṅgulī）は，『幻化網タントラ』では「穰虞利菩薩（Tib. Dug sel ma)」として説かれている[10]．右の3手に金剛杵，剣，箭，左の3手に期剋印に掛けた羂索，尾沙花，弓を持つ3面6臂の像容をはじめ，阿閦仏を化仏として額に戴く点，宝珠を頭上に有する七匹の龍を頭飾とする点など，『幻化網タントラ』の規定に細部まで完全に一致する．さらに光背の中に描かれた8尊の如来は，タントラの「観想諸仏満虚空中（Tib. saṅs rgyas gzugs brñan ḥphro ba can)」という記述に基づく表現と思われる．

4．剣川石窟に遺る八大明王像の図像

大理市の北およそ100kmに位置する剣川石窟群の石鐘寺区第6窟には，二比丘を脇侍とする触地印如来像を中心に，その左右に4軀ずつ，8尊の忿怒尊が浮き彫りにされている．各像の上部には尊名と尊位の記入があり，これら8尊は『大妙金剛経』所説の八大明王であることがわかる．また，8尊の尊位は，本稿第1章で紹介した『海会八明王四種化現歌賛』が説く八大明王の尊位に一致する．

しかし，『大妙金剛経』が説く八大明王は六足尊を除いていずれも2臂像であるにもかかわらず[11]，剣川像はいずれも多面多臂像であり，印を結ぶ降三世明王を除き，すべての明王像が左手の第一手に期剋印（tarjanī）を結び，そこに羂索を掛けている．これは，八大明王の造像に際し，『幻化網タントラ』の曼荼羅の四門と四隅に配される焔鬘得迦（Yamāntaka・東），鉢囉研得迦（Prajñāntaka・南），鉢納鬘得迦（Padmāntaka・西），尾覲難得迦（Vighnāntaka・北），不動（Acala・東北），吒枳（Ṭakkirāja・東南），儞羅難拏（Nīladaṇḍa・西南），大力（Mahābala・西北）の八忿怒尊の図像が取り入れられたためであろうと思われる．『幻化網タントラ』が説く八忿怒尊は3面8臂の鉢納鬘得迦と大力を除いていずれも3面6臂であり，吒枳を除き，左の第一手に期剋印（tarjanī）を結び，羂索を掛ける．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

また尊位に注目すると，『大妙金剛経』には明王の尊位は説かれていないが，剣川と『海会八明王四種化現歌賛』では，六足尊（大威徳），無能勝，馬頭，不動の4尊に，それぞれの明王と同躰とされる，八忿怒尊のうちの焔鬘得迦，鉢囉研得迦，鉢納鬘得迦，不動の尊位が適用されている[12]．

さらに，歩擲明王と尾覲難得迦も同躰視されていたものと推測され，歩擲明王像に「足下に障碍者（Vighna）を踏み敷く」[13]という尾覲難得迦の特徴が応用され，蓮台の下に象頭人身の毘那夜迦が彫刻されている．また北方とされる歩擲明王の尊位も，曼荼羅北門を守護する尾覲難得迦の尊位に基づくものと思われる．

その他，吒枳が位置する東南に降三世明王が配される点に関して，吒枳が『幻化網タントラ』の中で日本の愛染明王に相当する「欲王（ḥDod paḥi rgyal po）」と呼ばれていることを念頭に置けば，ともに金剛薩埵（金剛手）の所変である両者が同躰視されたとも考えられる．共通して北西を尊位とする大力と大笑明王も重ね合わせて捉えられていたものと思われ，ともに3面8臂の像容を示す．

おわりに

以上の考察から，大理国時代の雲南において，インド後期密教の聖典である『幻化網タントラ』が流布していたことは認められてよいであろう．

どのような経路で『幻化網タントラ』が雲南の地に伝えられたのかについては明確ではないが，本稿の第1章，第2章で見たように，大理国時代の密教文献は『幻化網タントラ』所説の諸尊に対し，法賢訳『瑜伽大教王経』とは異なる訳語の尊名，あるいはサンスクリット尊名の音写を用いている．この事実は，法賢訳とは異なる訳本（あるいは梵文原典か？）が参照されたことを示唆している．

白族を中心とする雲南の密教徒は，中原において密教が衰退して以降も，その法灯を保持しつつ，さらに新しいインド密教の情報を導入しながら，独自の密教を展開させたものと思われる．そして明代以降，土着の民間信仰や道教の思想と習合した雲南の密教は，阿吒力教と呼ばれる独特の宗教形態を形成するに至る．

1）拙稿「大理国時代の密教における八大明王の信仰」『密教図像』第26号（2007），同「大理国時代の密教文献『諸仏菩薩金剛等啓請次第』に収録される「般若心経法」について」『印度学仏教学研究』第57巻・第1号（2008），同「『諸仏菩薩金剛等啓請』所収の「毘盧遮那修習啓請次第」について」『密教図像』第28号（2009）．

2）『幻化網タントラ』については，松長有慶「幻化網タントラの性格」『印度学仏教学研究』第8巻・第2号（1960），拙稿「『幻化網タントラ』に見られる五秘密思想」『密

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

教文化』第211号(2003)を参照されたい.

3)苦米地等流博士のご教示による.ただし,写本は非公開である.

4)『通用啓請儀軌』および『海会八明王四種化現歌賛』の書誌的情報については,侯冲「南詔大理国仏教新資料初探」『白族文化研究』2003年号(2004),同「大理国写経研究」『民族学報』第4輯(2006)に詳しい.

5)『幻化網タントラ』所説の曼荼羅については,木村秀明「幻化網タントラにおける曼荼羅」『豊山教学大会紀要』第16号(1988),松長有慶編『インド後期密教〔上〕方便・父タントラ系の密教』(2005,春秋社)の第3章に詳しい.

6)アバヤーカラグプタ(11～12世紀頃)の『ニシュパンナヨーガーヴァリー』(B. Bhattacharyya: *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta*〔1949, Baroda: Oriental Institute〕)第20章には『幻化網タントラ』所説の曼荼羅が紹介されており,諸尊のサンスクリット尊名を知ることができる.

7)賢劫十六尊については,森雅秀「賢劫十六尊の構成と表現」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集・インド学密教学研究』(1993,法蔵館),田中公明「『アームナーヤ・マンジャリー』に見るサンヴァラ曼荼羅の解釈法」『インド哲学仏教学研究』第16号(2009)に詳しい.

8)李霖燦『南詔大理国新資料的総合研究』(1982,台湾:国立故宮博物館)の図像番号では第109図と第112図.

9)漢訳:大正蔵第18巻・568頁中段,チベット訳:デルゲ版Ja帙・109葉表.

10)漢訳:大正蔵第18巻・567頁下段,チベット訳:デルゲ版Ja帙・107葉裏.この部分は『サーダナマーラー』に引用される(B. Bhattacharyya: *Sādhanamālā*〔1925, Baroda: Oriental Institute〕, No. 117).

11)大正蔵第19巻・340頁下段～341頁上段.

12)同尊同名の不動と,いずれも大威徳明王とも呼ばれる六足尊と焔鬘得迦が同躰であることは論を待たないが,『ニシュパンナヨーガーヴァリー』第20章や『秘密集会』系の十忿怒尊の体系では,鉢囉研得迦は無能勝(Aparājita),鉢納鬘得迦は馬頭(Hayagrīva)の別名で呼ばれる.

13)「左足踏諸魔(Tib. shabs kyis bgegs ni mnan pa ste)」.大正蔵第18巻・566頁中段,チベット訳:デルゲ版Ja帙・105葉表.

〈キーワード〉 雲南密教,『幻化網タントラ』,大理国

(高野山大学非常勤講師)

NII-Electronic Library Service